

「遺跡から見つかる植物遺体」

縄文時代の食料として重要だったものは、クワやドングリなどの植物だったという話はよく聞くとします。貝や動物なども食料としていましたが、主体と考えられるものはやはり植物性のものと考えられています。ですが、植物というものは、丈夫な貝殻などと違ってすぐ腐り分解され、縄文時代から現代までの数千年間の間に形がなくなってしまいます。

新鮮な植物遺体は、低湿地遺跡で水に浸かったままでパックされた状態など、限られた条件下でしか見つかることはありません。台地上の遺跡では、そういった新鮮な植物は出土しませんが、炭化した植物遺体は見つかることがあります。

土浦市内では、下坂田中台遺跡（下坂田）や六十原 A 遺跡（桜ヶ丘町）から炭化した植物遺体が見つっています。炭化したクルミの核（堅い殻）やドングリ類の炭化した子葉などです。植物遺体の中でもクルミの核は堅くて丈夫なため、保存されやすいです。

一丁田台遺跡では、古墳時代の住居跡から炭化した米の塊が出土しています。観察すると、塊の一部に網代の痕跡が認められます。もしかすると、おにぎりがカゴなどに入れられていたのかもしれませんが、お弁当箱につめたおにぎりごと焼けてしまったのでしょうか？そう考えると残念ですが、どうして焼けたのかはわかりません。種などの植物遺体は小さなものばかりです。調査・整理中にしっかり観察しサンプリングをする必要があり、今後も蓄積していきたい資料です。



一丁田台遺跡出土炭化米塊（土浦市木田余）